



伊勢物語和歌
 三十六人女歌仙
 六々貝合和歌
 十二ヶ月和歌
 今川にはぞらへ女誠条々
 源氏物語和歌
 仮名二十四孝

かまてりのものは葉はまはりこゝろもきあふるもあはれなり
 足らの女志のふりらまはりたれもあはれなり
 お記をせよと詠もせくもあはれなり
 おひめくしむら女君に詠もあはれなり
 月見の女志やじり女志あはれなり
 今更ぬらむらひの女志あはれなり
 ありむらむらひの女志あはれなり



五井

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page. It begins with a small symbol on the left margin and continues across several lines.

Handwritten text in Arabic script, continuing from the previous page. The text is written in a cursive style and spans the width of the page. It begins with a small symbol on the left margin and continues across several lines.

うりそしむのひの春のふあふ都のつらふに
あふそまのひながふらとれ人ふふのまこと
まよひてあひしるまよひしるまよひしる
年なも十ととて川に流るまよひしるまよひ
おまよひのあまよひしるまよひしるまよひ
秋やるまよひしるまよひしるまよひしる
あふらと名ふしとたれ桜花年にはまよひしる

うりそしむのひの春のふあふ都のつらふに
あふそまのひながふらとれ人ふふのまこと
まよひてあひしるまよひしるまよひしる
年なも十ととて川に流るまよひしるまよひ
おまよひのあまよひしるまよひしるまよひ
秋やるまよひしるまよひしるまよひしる
あふらと名ふしとたれ桜花年にはまよひしる

あふくはるはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

今いふはあつらひし月をいふはちかき我

わづ玉の糸はこももまらとびて乃あひりたよお
あしひきまむかひのむらさきあしひき
あじろいかにあはるくはさあうの我まひはそとにをぬ
杖の燈いそむた一釣の袖をまもるはそむらぬ
えらめお記のうらむとくはねのあはれをそあはれあし
あむと袖をんねまのうくはねのしはゆはらし
よねの物ねはくくはとあしとあはれは下にもあはらり
えねらよ我もあしかにうらあはれいにくらに
かそくあはれいそはねにあらあはれいそはねの
花はあはれあはれいそはねにあらあはれいそはねの
あはれいそはねにあらあはれいそはねのあはれいそはねに
はなとあはれいそはねにあらあはれいそはねのあはれいそはねに
あはれいそはねにあらあはれいそはねのあはれいそはねに
あはれいそはねにあらあはれいそはねのあはれいそはねに

右

宮内

足る世ふくくうりよる記その花も松もあふみの神也

丸

中務

秋風のかいほあそもとのぬれおふれあふまはな

右

周防内侍

ちきりしはゆぬほつとあふのる記かえをうみま

丸

殿富門院左輔

たふらふしよもあふのる記かえをうみま

右

後成御女

彼乃かえをうみまあふのる記かえをうみま

丸

右近

あふとを神は月日かえをうみまあふのる記かえをうみま

右

侍賢門院塔河

うみまあふのる記かえをうみまあふのる記かえをうみま

丸

右大将道總母

をえぬるかけふんひさふ魚尾をこのあみらさひ

右

宜秋院丹後

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

丸

馬内侍

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

右

嘉陽院越前

友のふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

丸

赤深堀

はふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

右

二条院讃岐

一徳とふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

左

和泉式部

とふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

右

小侍候

志記に依む山崎の露よぬまふりあつと松子のまみその

袖

左

花人左邊

浪よに袖忘れのあやのまおのふにほる袖をいもむと

右

坂名根院下野

ふしとさふり記をきりてはかゝる袖き老の袖さめに

左

紫式部

ふしとさふり記をきりてはかゝる袖き老の袖さめに

右

弁因侍

ふしとさふり記をきりてはかゝる袖き老の袖さめに

左

小式部因侍

ふしとさふり記をきりてはかゝる袖き老の袖さめに

袖

右

少内侍

ふしとさふり記をきりてはかゝる袖き老の袖さめに

あつては

丸

秋宮世濟

かれはうき世をれとや波の何れもは海を夜も成る

丸

仔細かを補

とれはあの日なりあつたまをまもつて故人を祈る

丸

清少納言

まよりあつたやふと松まにまをそく記のまをつら

石

土御門院寧ね

とれはまをいふ流をそふ記夜の何れをんまの
ひれ

丸

大式三位

とれはあつたやふと松まにまをそく記のまをつら

丸

八条院言念

とれはあつたやふと松まにまをそく記のまをつら

丸

心也傳

ひよりぬらんまをいふ流をそふ記夜の何れをんまの
ひれ

右

後醍醐院中納言

備りと申すて人色ち終り之かきあひの世なりつゝ

左

一宮紀伊

いづれも記あけの候るぬちより波ららしむるに
たつあり

右

式乾門院御画

かかるといふなりし記世と云はれしもの中とむたつては

左

お摸

のりよといふなりし記世と云はれしもの中とむたつては

右

藤原院御画

それよといふなりし記世と云はれしもの中とむたつては

六、貝合和奇

左一巻 右一巻

浪が吹くその波は貝の風をさすしそ記あり

右一巻 左一巻

浪の波破るその浪の口を貝とす此浪を松の口と

左一巻 右一巻

浪の波やうらぐさの波はくさの波をさすしそ記あり

右二

龍貝

枝やうしうまう浪のそねやうりくやう千代志をかうい

丸三

楳貝

仔鶴乃う浪のまうさうしう貝のひあさうしうのまう那

丸三

ますが貝

志海そむまうあふんむりやうまうの浪とひんやう

丸四

むら貝

むら義乃貝の浦は及ぶ浪のうはそまうしう

右四

白貝

らるるあうらうあうの志し貝のうはそまうしう

丸五

ねてし貝

子し海志あてしし貝の志し海はあうしう

丸六

浪房のハ

難波めりるあうしうしうあうしうしうしうしうしうしう

た六

えぬた貝

繋りたて一夜のうらた秋少きうらたぬらうかひもあ

日記

た六

枕貝

舟とせよそら浪海のまら貝のひらき夏にわはけあやハ

た七

綿貝

あさませふあをほりてまうひふきの浦とんちふら

た七

又貝

いぢくの貝つりてむらあま進ちこの浪のあまはく

た八

ほ貝

山あいのわら吹きより夕暮りそともあまをたうハクセ

た八

ちや二貝

あまをたてぬりあまこの名少く入らんや二貝をたすのむら

あま

た九

うら貝

田舎のうらうらあまをたすうらたけく浦の貝はむらいつ

た九 心考入

つるむの瀬戸の志つが求おあしそく記あまはち記ぬら

た十 子名貝

らぬらうあまはちあまらばらうあまらひらうらうらあまら

右十 子名貝

あまらう竹の志つりのあまはち貝くれも世あまらひよらうら

た十一 心考貝

あまらうらうらみほし記板屋貝と海あくあまらうらうらうら

た十二 心考貝

あまらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

た十三 あまら

あまらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

右十三 か丁貝

我袖六うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

右七

鎌貝

此の頃の貝はひろくみよりの磯にひらいて入る

右七

とぬり

今を志らぬ頃の浦乃とぬり貝をたてふ

右七

とぬり

今を志らぬ頃の浦のあまはとぬりにひそめ

左六

小貝

此の頃の貝は約とて都のはとて小貝ひろく

右六

小貝

右の代りとてとぬりとぬり貝の教は

正月 柳

打ちひらきくら河の色をねや日と魚をそむる柳葉

春さそはくくもすまぬ船を舟よりひらきぬるまの

二月 雛子

物人の衣履よと家まじ目とつまはまの工をよふ

かゝる家なりの孩もなさらふもふはなはきぬ

三月 春

いさ

ひまのるんや咲ぬる花うさぐさの垣をさのゆくりに
すみま咲ひまりの藤よ若かりて世をあつしむるはまを

四月 かきまは
卯花

白妙の衣むせとふ夏れきる垣ねとなふさうの卯花也
かきまはふらふらとふれまた卯花は花の育つる川あり

五月 かきまは
うい

桂のたをさきくあり鶉かき明あよ人々のあはれおの
うい

郭公なるやこの春ふかりかきまは白ふねらるるを

六月

大さ日新はさふに卯月の花をさか死をよなるの花
ういこの川よのわさかきまはのさくさうりまは花

七月 かきまは
卯花

秋をらて世とあひぬまはれし咲るやまし星合はる
長夜もえぬをあつらふ咲とて秋まらつるかきまは花

八月

神鷹
麻呂草

秋の草ぬいりるをきとふはよやそらるるふりて

多紀

詠つ秋の草も現のふなまの初りの草

九月

すさ

詠鷹草れ枝のつも草は枝すそらまゆく秋のつ

人先さういふうらうれぬやまの草よううらうら

十月

秋菊
五郎

か月霜よの葉の白くは秋のこころよ何の草

夕日紅むれる田舎さうさう時菊のこころめり

十一月

枇杷
ちどり

冬の日本草あなをの葉を葉うね枝の花をまうる

子そらぐくもの河原の草は月ひらふさくふあひのそ

十二月

あま
よめ

あまはむ垣根の草は比治うらうらあまの白ふあう

かゝる事と此の事とある事とふたつをわけるの必要

今川よかそへて女もつゝめは衆々

- 一 常の公事——流儀のいへて女のみならず的事
- 一 ありき女を養ふ事おつりをせしむ事
- 一 小事誠を思ふて考へなく何とむす事
- 一 人事ともいふ事なく教をうらむ事人ふか事
- 一 主君の御事かんをまされ志者を誨る事
- 一 丈夫なりめかるといふ事し天啓をばせし事

- 一 道小をむくも業るものごとくを縁ふ事
- 一 正連がくがらつくも若きなりしむ事
- 一 極小をくし或は座に或はん物と記ふのむ
- 一 短急がくもよのむく人乃船をくらふ事
- 一 女乃は利根もよひ事小付人をさす事
- 一 人の中と成言さく人のれをさす事
- 一 乃を存くもよの事なれりして百はん苦事
- 一 考とくや記も世のらるはと成りまは
- 一 余徳をよのむ事
- 一 人若くをんを我智をく事
- 一 各家のつを学川とむく事傍あり
- 一 家り分限を知はありはたを或はぬ事
- 一 上の若急成記をばくつらひ事
- 一 習始よそ何れも人のそく事

一 孝の徳に化の類をあらはす事
一 男孝の徳に親類縁者をあらはす事
一 親孝の徳に親類縁者をあらはす事
一 人孝の徳に其親をあらはす事
一 友孝の徳に常に女に教ふ事
一 兄弟孝の徳に常に兄弟を教ふ事
一 宗族孝の徳に宗族を教ふ事
一 郷里孝の徳に郷里を教ふ事
一 宗族孝の徳に宗族を教ふ事
一 宗族孝の徳に宗族を教ふ事

一 孝の徳に化の類をあらはす事
一 男孝の徳に親類縁者をあらはす事
一 親孝の徳に親類縁者をあらはす事
一 人孝の徳に其親をあらはす事
一 友孝の徳に常に女に教ふ事
一 兄弟孝の徳に常に兄弟を教ふ事
一 宗族孝の徳に宗族を教ふ事
一 郷里孝の徳に郷里を教ふ事
一 宗族孝の徳に宗族を教ふ事
一 宗族孝の徳に宗族を教ふ事

事なり一人の女常の理をうまき生れ
こゝも或は人なり或は人なり
かたも知らずなりかたも知らずなり
男子の師をたゞしはあつたを知ら
及するはむかひなりとも女子は
及人なりなり女子はくはくして此の
おしりまの地の留名ははるありなり

よまれと親のよまらぬ哲のうらや
かひて親をたゞしはあつたを知ら
及するはむかひなりとも女子は
及人なりなり女子はくはくして此の
おしりまの地の留名ははるありなり

登夜之ひのり残光りし暮人よは
互仕魚一少ををよしちめては
れ物と均とと誠よ即ちよはか
そふ也然く怪魚一きふかじ
いぬまのかくの

桐壺

いふにきき物りもひよあつとを繋るをいむ
あつとわ

常衣

枚あつぬふやふとあるふいあおふも何そ
あつとわ

有蟬

ふはあつぬふとてきちあつとあつとあつとあつと
あつとわ

夕歌

よるてし花をれともん免こそ ねはかめいさちり花の夕顔

着紫

よるてし花をれともん免こそ ねはかめいさちり花の夕顔

末摘花

なつさきりともはふあふさかすも思つむ花を袖ふりて

紅葉賀

よるてし花をれともん免こそ ねはかめいさちり花の夕顔

花宴

よるてし花をれともん免こそ ねはかめいさちり花の夕顔

葵

よるてし花をれともん免こそ ねはかめいさちり花の夕顔

柳

よるてし花をれともん免こそ ねはかめいさちり花の夕顔

花散置

昔の北のをあらうらんがよき流記を頼りてを

須磨

う紀元ういせたのあらうらんがよき流記を頼りてを

明石

秋の東の流記を頼りてを

落標

か流記を頼りてを

遠生

う紀元ういせたのあらうらんがよき流記を頼りてを

関屋

う紀元ういせたのあらうらんがよき流記を頼りてを

繪合

う紀元ういせたのあらうらんがよき流記を頼りてを

松風

花の葉より枝より葉にねくつらぬ袖はあはれ

友妻恋

き日はあつきのうのうとまてきかひのれあし

あま菜上

おのころすゑのうらひのれや昔恋のうらみ

若菜下

おのころのうらみとくはまらしく(ま)く(ま)のま

柏木

おのころのうらみとくはまらしく(ま)く(ま)のま

横笛

おのころのうらみとくはまらしく(ま)く(ま)のま

鈴虫

おのころのうらみとくはまらしく(ま)く(ま)のま

夕暮

ちやうはんの集々たのんきあつたむかひのまじりたるは
やまのうら

総角

あけもたよふとて舞をむむひおあはれはあはれ
あはれむ

子歎

あのみまなほふらんせんかた人のこゝろよらあはれ
あはれむ

宿木

やうたごひひそるまのまはひは福とらふんこ
あはれむ

東屋

うらむのむくまはむらあはれあまそ
あはれむ

浮舟

たをぬのあしはらあつたしあはれあまそ
あはれむ

蜻蛉

あはれあしあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれむ

多智

ゆへらほそれゆへ美作に...
眼をいそふき...
ふしそし...
ゆへらほ...
ニッが...
ふしそし...
ふしそし...

吳^に猛^り

いひのハヤカして...
しそふのむ...
この...
あふ...
なも...
よら...
か...
か...

こむしをたもつるふり記をりあれにたしむるたやせうくむしにひく
小天原の心ちよれあてていとゆれあふふ大北の
けと竹の子ちもいあがら大さいなるひねてり
あつものふつたり世よあてゆりけむの病もいへいなり

郭巨 くわくこ

ふりあまふるんこふれあの人こむしをりくくせふと母
るくはくせりのこつふ女子を捨たりるるむしをりあてり

りあがりるるあくものこむしをりあてりるるむしをりあてり
後て母の食えりる後にあて捨る肉を命りてむしや
りしあてし女子のむしをりあてりるるむしをりあてり
さんとすぞふあてりりける中をこむしあてりるるむしをりあてり
天をるあまよにあてりるるあてりるるむしをりあてり
のこむしをりあてりるるあてりるるむしをりあてり

朱書昌 しゆしやう

宗の天也代の人あり七也の記文より其の意ことありし
時きあつてやが母をおひ出せしこれな中(ま)がら母をみ
ぬゆとるましこおけまらるる人ありとまをて母を給ひふ
出たりし母よあがすは二ふひつしと母なちまが、給を
去天原(あ)の母よあをせぬれとふくふせいけり
けし世のふつとく給ひあひたりと母のうせし
あま好りたひよ涙とるし恨りつるましこの若く

と木の音にさしおふそしの人や又りあをせり
付多ひつりはゆよつとくくれがりし也

曾久

そしんはぶらやらんの人ありしのでしと
なりしあつてはまどにらまあむびつとて人としを
中(ま)たきとまよむるまをいそし記友ましきりま
りそがしきかひよまそまんは内にあつてえりし

有りやそ我を仰り母よあの人仰り乞ひ給ふは若かりの
少くをよそ命に母に人の祈りももつ初りれらよ
あらし也

蔡順

ふい昔んぢよあんとてふりよそありの父よをれて母
を中よと法をさしつゝのらんとあつて天下一
世をよとんあねの命よにたかへ母をやあまたり

すなぐ業のそまひろい夜て母を中よあはれによの乱ま
にり人を教へてえつるも若た来れ蔡順業れそ
の音こたをてあへたをよより分けををたあへて
を母にあはれをうけつる人ごのんまひま二年とし
り是つあはれを母をよそあつてのめを母よはつて
おと命よつらごいのるつまをたあつてと乞若かり
る者よな也

庚珍婁 ゆきんろう

ゆきんろうはせんせいのおとにり人のせんをひたしつゝありの
まんにんはなるるびあはりるるもむし十のふもあへつゝ
ふいふよむかひに記さげまは父のまゝふふとむとむと
すそつりつれはりんのまゝ父のまゝ限ありかたらんろう
醫師に吉あふふいふれは病人のせんをあてあまへ
よぐいふらんろうとふせんろうかおのせんをあてせんろう

あらしの醫師のつひとらひつれはるるらんらんらん
このがふいのりそ父の命にかかりまがいのちをとりそ
たへとふくそむいそむいけはるるがよのなむらんらん

心名 こころな

せんはくはそつそこの人へ今にむして侍人の目とらんらん
まりゆのあ坡のでしあむつらんらんらんらんらんらん
らんらんらん母の大小のらんらんを記ありらんらん

あつちを好む兄貴にせうんさんの討取のを拾ひ
ハトにあまの母とやうなり其のちをいふものを
けり盗人なも中中打りして小てくんと
我老る世と申す今人の食ふとまうせぬ母は食
とまうせぬ後はよしとせんとて其の母とを
まうせぬ人本ら兄のちをすてけり本らて其の家
へくれの食ふふよりく〜我とあ〜あ〜のちを
家々の物事ありとて兄弟をわする盗人も是
とて死をわす〜とて二石に終つたなり
是をいふゆゑに孝行つ〜なり

田舎田舎田舎

け三人の兄弟をわす〜とて兄貴三人中へ
小つちの家の話をいふ〜とてそれるが
とふん〜ゆゑに〜のちをわするは

こつよとけとるべしともはめく候合し作りぬおめて
みまははな枯らり葉まをりとも合んとしをば
枯らるとるり人としてをともばりしやをり
たびしてを記けきハ又いものともをまけり記を記
實のりてひささり穢ふはと合らたし記の名と
くごんよ却てせらよ名をとるる也

刺子

せんーはうこの人父母おひてたふあんとさうふーが
いらり小鹿の乳を月おれはうとさりせんーはうり
孝のふ記ゆへ鹿の皮とりあはをさるへ中しよへ入
阿まの麻のむかの中ま記れ入て麻の乳をうんとま
西へり人あつて夫をいりさんとさうと記せんーはを
りけはまの麻のむかせんーはのしるあはの
るくとけりあはのむかせんーはのしるあはのむか

ふく紀ゆふ夫とのくれ麻の乳もれりり母よはるる
是孝のそいより命もすひ命とのくれと也

陸續

くせきハ長のおろ人こあめの上記まんまありとく人の
あけりりくくいにらるるをせられたりもくせ記を紙
二つねて袖に入れてゆらふまんまおにまのるるた
まよりがとちりまんまありこれせん陸續よのハおらま

人よにあぬとくお作りけまハおまりんものねわくおあよ
ゆり母よあつんだあこも作りぬまんまありはしてあこ
おんそくゆりのおつけ古今よまねかまらとがめらと也
ふそくを天下けらまあく世人このまくせ記がやしくまら
とまきりいとやう記孝記也



